

# ネギハモグリバエ バイオタイプ B の防除

農林センター 問い合わせ先:農林センター環境部 0771-22-6494

- 主な成果**
- 調査の結果、府内全域でバイオタイプ B (以下 B) の優占的な発生を確認しました。
  - Bはバイオタイプ A (以下 A) より短い日数で増殖できる生態が明らかになりました。
  - 効果の高い薬剤は A とは異なりますが、 B に対して効果の高い薬剤を選定しました。
  - B には 2 科 9 種の寄生バチの寄生が確認でき、土着天敵として活用が期待できます。

## 成果の内容

- 京都府内では B の発生が優占 (2018~2021年調査)

	Aのみ	Bのみ	AとBが混発
2018年	2	18	2
2019年	0	28	6
2020年	8	29	5
2021年	1	12	0

※数値は延べほ場数

京都府内全域(北部から南部)まで  
優占的に発生

- 18~30°Cにおける発育所要日数 ⇒ BはAより短い

表 ネギハモグリバエ両バイオタイプの卵から成虫までの発育所要日数(15L9D)

	温度					
	15	18	20	25	30	35
バイオタイプB	68.3±1.2	41.8±1.8 a	32.1±0.1 a	22.8±0.8 a	16.6±1.1 a	ふ化せず
バイオタイプA (徳丸, 2016)	68.3±5.5	46.0±1.2 b	35.7±2.0 b	23.3±1.2 b	19.4±0.9 b	?

平均値±標準偏差  
※同一温度の異なる文字間で有意差あり(Mann-Whitney の U 検定,  $P < 0.01$ )。

Bの発育零点は 10.0°C, 有効積算温度は 333.3 日

発育所要日数...BはAより短い

⇒BはAより高温条件での増殖に適した生態の可能性?

- Bの幼虫および成虫に効果の高い剤 ⇒ バイオタイプ A (以下 A) とは異なる

IRAC コード	薬剤名	希釈 倍数	B		A
			幼虫	成虫	幼虫
3A	アグロスリン乳剤	2000	◎	○	×
4A	ダントツ水溶剤	2000	△	×	×
5	ディアナSC	2500	×	△	-
5	スピノース顆粒水和剤	2500	×	△	-
6	アグリメック	500	△	×	-
14	リーガード顆粒水和剤	1500	○	△	×
28	ベネビアOD	2000	○	×	○
30	グレースシア乳剤	2000	△	○	△

※ ◎:補正死虫率が90%以上、○:89~70%、  
△:69~50%、×:49%以下、-:調査なし  
幼虫:アグロスリン乳剤、リーガード顆粒水和剤、ベネビアOD  
成虫:アグロスリン乳剤、グレースシア乳剤

- 寄生バチは2科9種



ハモグリコガネコバチ



カトウヒメコバチ

2020年および2021年...Aの結果と異なる種構成率

*H. circulus* が最も高く、次いでカトウヒメコバチ

寄生率...2020年:26.0%, 2021年:33.5%

多様な種の寄生を確認 ⇒ 土着寄生バチの保護活用を

- 期待される波及効果**
- Bの発生生態や効果の高い殺虫剤の知見を活用し、防除対策を講じることができます。
  - 土着捕食寄生バチを保護活用した、持続的な防除技術を開発することが期待できます。